

要求するのだろうか。

この夏、キャスターの背広を脱がせる、51年5月、毎日新聞の記者に話したら「革命です。ネットニュースでやったら、夏、背広を着ている職場の人は喜ぶだろうナ。日本の服装習慣が変わるかもしれない」。スタジオを人間的な空間に変えたい、私はただそれだけだが、結果として服装革命になるなら、それはそれで素晴らしい。

暑い夏、キャスターが背広をぬぐーそれは受け手と生活感覚を共有することだー。たかが背広でも、私にとっては「伝える」ことの本質にかかわる問題なのだ。

テレビニュースは
もっと視聴者に近づくべきだ

『レポートTBS6』には二つの課題があったと思う。第一は勿論、地域情報媒体としてのテレビの在り方を探ること、もう一つは「伝える」ということは何なのかを探ること。つまりテレビの原点に立ってニュースを考え直すということにほかならない。

10年前、どん底にあったラジオは、試行錯誤を重ねたあけく「ロカルに生きる」新しいラジオの

世界を築いた。原動力となったのはパーソナリティという個性豊かな人格の発見であり、電話TBS950といったラジオと市民の交流のための新しい手段の開発であった。同じように、原点に立つテレビは、地域社会に対する一方的な送り手ではなく、市民との相互の交流と共感の輪でつながる新しい情報分野を開拓しなければならぬ。ラジオという地域情報媒体にいた私にとって、これはゆるぎない確信であった。ローカルのテレビにとってはラジオはまたない先人であった。

私はレポートのオープニングを夕陽のVTRにしたかった。大洗の夕陽、夢の島の夕陽、歩道橋の夕陽、夕陽には人間のさまざまな想いがありドラマがある。だが生が原則のニュースということでこれは撤回した。ただその想いは今のオープニングにも受け継がれているー銀座の街角、人待ち顔のOLや地下鉄に急ぐ人びと、いかにも一日が終わったといった生活感のある画面に小室等の曲が流れる。番組開始の翌年初夏、荻窪の辺りを歩いていると、2階の窓辺でギターを弾く青年がいた。曲は

レポートのテーマミュージックだった。その瞬間の身が震えるような感動は、今も忘れない。後に小室等のアルバム『TV・MUSIC・SERECT・ON』が発売され『レポート6』一夕暮れに『が画面に収められている。かつてニュースのTMがレコード化されることがあったらうか。

ニュースは、始まりの画面から



取材中の山本キャスター

語りかける何かがなくてはならない。語り手も同じである。キャスターには、普段はそうではないのに、一旦スタジオに入ると「私はニュースを伝えています」という

顔になってしまいう人が多い。あの顔は送り手と受け手をはるかな距離に遠ざける。一段と高い所から、そんな印象をぬぐえない。

私が欲しかったのは、泣き、笑い、とまどい：受け手と同じ場に立って、普通の人のような弱さもある、ニュースキャスターというよりはパーソナリティと呼べるような人だった。初代の撫養慎平氏も二代目山本文郎アナウンサーもその点では同質である。

誘拐された赤ちゃんが無事親の



初代キャスターの撫養慎平さんと
高橋加代子さん

手に抱かれた特集へ幸恵ちゃんを追って(50・10・8放送)のあと、撫養さんが涙で言葉を詰まらせてしまったとき、正直、私はシメたと思った。それまでのニュースキャスターのように微動だにし

ない「権威」ではない人がそこにいたからである。涙はニュースの中味を伝えてはいない。しかし、記者がレポートした事実が持つ意味を、あの涙ほどの確に伝えたものはないと私は信じている。

視聴者を一步でも現実
近づけなくてはいいけない

テレビニュースの現場中継ほど活き活きとした画面はない。事件現場は勿論、午後6時に生中継できる素材は「生」で伝える。最初の6ヶ月で中継車のスタンバイは120回を数えた。情報を伝えるということは、諸々の事柄を間違えなく伝えるだけで十分だと考えたらそれは送り手側だけの論理だ。視聴者をより一步現場に近づけなければならぬ。面白く見せる努力をして視聴者に媚びたていいではないか。

この番組が報道局内にカメラを置き編集現場からニュースを伝えていたのも現場中継の一つとして考えたものである。いち早くニュースが入るといふ臨場感が視聴者の期待を高める。ニュースの伝え手に、警視庁クラブ歴9年という料治記者を選んだのも画面に現場

の匂いが欲しかったからだ。事件、事故の背景やその後を伝えるときは、取材したVTR素材



料治直矢さん

も交えた現場レポートを重視した。記者の現場レポートは原稿をアナウンサーが読むよりも、はるかに受け手と現場の距離を近くする。

米軍機が民家に墜落、子ども2人を失い妻もまだ生死の境をさまよっている。焼けた家の庭は草もなく、記者の淡々としたレポートにかぶって、焼けただれてまばらに残る大木の間をカメラが一人称で進んで行く、見るものがその悲惨な現場に誘いこまれるようだ。

〈米軍機墜落から一ヶ月〉(52・10・22)これがテレビニュースの画面というものだろう。

受け手との間に

共感が生まれる

これこそがニュースだ

新しい方法として記者自身が被取材者の立場に立つ体験レポート

も試みている。へ9階からハシゴ車で救出大作戦(50・11・2)では、火事でビルの9階に閉じ込められた人をハシゴ車で救出するという消防訓練を記者が被験者になってレポートした。

—そろそろ火災発生時刻です。9階の窓(下をのぞく)、私はここから救出されるのですが、下を見ると人間が豆粒です。コワイなア；サイレンです、ハシゴ車が来たようです、窓から人が笑って見えますが、冗談じゃない(ふるえ声) ホントにコワイんだよ。あッ、ハシゴがのびてきました。あれッ、そんな向こう、もつとこつち(絶叫)一メートルもあるんじゃない(落ちこなう。あッ、下へ行っちゃった。こんなことしたらホントの火事なら死んじゃうよ(憤懣) あア、ヤッとまた来ました。これ乗り越えるの、えッ、命綱ないの！

救出時間は一秒も狂わせませんと消防は言ったが、3分の予定が18分費やしている。消防士が被験者なら一メートルの空間を渡ったかも知れない、従来の記者取材の方法では到底表現できない映像である。

情報は、送り手があつて受け手

があり、受け手が何らかの意味で送り手に共感するとき、はじめて情報としての価値が生まれる。

信濃川河川敷といえば田中金脈の原点だ。52年10月末ここが払い下げになった。企画会議でスタツフが言った「何万平米っていうけど、誰か見たことある；オレ、みてみたいんだナ、視聴者だつてそうだと思ふんだ」。よしッ、料治に歩いてもらおう。

へ金脈の原点！信濃川河川敷ルポ(52・11・10)は、石にツマヅキ、草をわけ、国道を横切り、端から端まで料治直矢が一日がかりで歩き、走った。その広大さはい。地図フリップだけではつかめなかつた土地の広大さを実感し、それが不当に安く払い下げられる—送り手と受け手との間の怒りの共感が生まれる。

受け手は送り手でもある

かつて、受検勉強に疲れた青少年たちは、孤独な心情を手紙やイラストに託して深夜放送のパーソナリティに送った。これらの手紙が電波に乗って同じ環境にある多くの仲間たちに共感の輪を広げて

いった。ラジオは人びとと対話することの大切さを学んだ。

「レポート」のスタジオには家庭と結ぶ10本の電話がある。この電話を通じて、視聴者はあるときは情報の主役となり、送り手となる。電話は、庶民感覚に溢れた生活情報の収集、また、自分たちが参加できるテレビという点で欠かせないものである。

身の廻りの珍しい話、面白い話だけではない。へわが街の危険箇所(55・7・6)では、市町村でも



つかみきれない大雨危険地帯情報
を特集した。視聴者情報による全
調査特集は記者クラブでは手に入
らない貴重なものである。

人びとと同じ場に立って

点のテレビから面のテレビへ

48年度NHK国民生活時間調査
で見ると、午後6時～6時30分の
東京圏(東京、埼玉、千葉、神奈
川)の人々の生活動態は次のよう
なものである。

①主婦は93%が在宅。30%が、な
がらではない視聴者である。

②勤め人(男女)の30%はすでに
帰宅しているが、テレビ視聴は
その1/6～1/4である(15分
単位)。

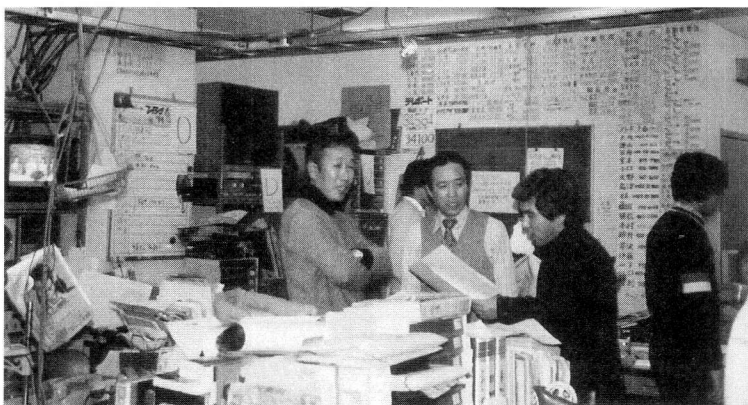
③東京23区では、25歳～60歳の男
性の72%が在宅している。

スタッフ全員がようやく勢ぞろ
いしたのは番組開始の1ヶ月半前
だった。全員でこのデータを前に
午後6時の関東ローカルとは
何かを熱心に討議した。

今も確たる答えは得られないま
まに五里霧中の毎日である。ただ
2年以上たって視聴率が20%を記
録する日もあり、15%をこえる日
も多い。番組開始時の50年10月平

均の4・9%が、52年10月に12・
7%になった。私たちの歩いてき
た道が間違っていないかったことだ
けは確かなのである。

伝え方ばかりではなく、素材の
面でも、スポーツ、芸能、民俗……
あらゆる分野を探し廻った。共通
するのは常に視聴者と同じ場に立



打合せ中の藤林キャスター(中央)とスタッフ

つということであつたと思う。
それは赤坂という点のテレビで
はなく、関東という面のテレビに
することだ。

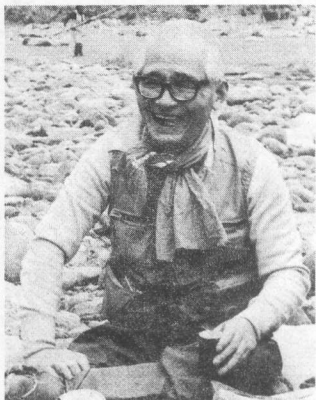
《あとがき》

『レポートTBS6』スタート
の頃、夕方6時代前半は子どもの
時間帯だった。営業はスポンサー
が降りると言い、報道局内も看板
の『JNNニュースコープ』にい
ささかの影響も与えることは出来
ない、ローカルに人はさけないと
いう声が大半を占めていた。

スタッフは、制作、スポーツ、
ワイドショーなどニュース人間が
知らない苦労をしてきた人たちが
必要だ。それが私の考えで、ニュ
ースからは精鋭を6名指名した。

わずか11名の混成チーム。企画
会議も侃侃諤諤、当初はなかなか
噛み合わなかったが、ワイドや制
作の人間はニュースを学び、ニュ
ース人間は、映像の構成、カメラ
ワークを学ぶ。飲み、かつ激論の
毎晩だった。私が言ったのはひと
言「いつか、スコープの視聴率を
抜こう」。

だが私は生みの親に過ぎない。



「釣り談義」の稲葉修元法務大臣

育ての親は次のリーダー三好和昭君だ。彼は『関東人間模様』のあとがきに書いている「ブラウン管の奥で、ぼくらは日夜、傷つき、悩んでいる。何をどう伝えればニユースの本質に迫れるのか。まだ歴史のないテレビに「これぞテレビニユース」という定形などない。肥沃な耕土か、不毛の荒野かわからないが、ぼくらの前には無限の地平が広がっている。

過去の遺産など知っちゃいい。過去から「飛んで」しまえばいいのだ。カミシモを着てムツカシイことばかりブツのが脳じやない。中学生もOLも、お年寄りも、誰もがすぐ判りかつ共感を呼ぶニユースは作れないものだろうか。三好のリーダーシップで、釣りを楽しむ間に軽妙洒落な語り口で



「ベビーホテル」受賞祝い
中央は堂本暁子プロデューサー

政治、社会を切る「稲葉修の釣り談義」。行政は勿論、保育関係者も実態を把握していなかった「ベビーホテル」キャンペーンなど数々のヒット企画を連発して、結果的に『ニユースコープ』の視聴率を押し上げた。

更に、数局しかこの時間帯に1カルニユースワイドを編成していなかったJNN各局もあいつぎ「レポート」を編成、系列総体の取材力は格段と高まった。

番組開始15年後、TBSの午後6時代は60分の『ニユースの森』になり『レポートTBS6』は終わる。もう一度言いたい。今、民放の夕方のワイドニユースは、これがニユースだろうか。